

技術情報

J A 全農やまぐち

TAC 営農推進課 (083-988-0681)

平成25年3月25日 発行

第 168 号

麦類赤かび病の防除について

赤かび病は、被害粒が1000粒に1粒以上混入すると販売できなくなるきわめて重要な病害です。適期、適切な防除に努め被害を防止しましょう。

防除時期の基準となる麦類の出穂時期は、3月19日発表の山口県病害虫防除所技術資料第11号(別添写)では、11月中旬までに播種した圃場では平年並みと予想されています。

つきましては、出穂状況をよく観察するとともに下記及び技術資料第11号を参考に、適期の予防散布が徹底されるようご指導をお願いします。

記

1 防除時期

- (1) 1回目：最も重要な防除で、防除時期は開花始めまたは二条大麦で穂揃期後10日目頃です。出穂状況を観察するとともに以下の例を参考に適期防除に努めてください。

防除時期の目安(例) (山口県農林総合技術センターほ場：平成24年11月15日播種)

麦種	品種	1回目防除時期		穂揃期		
		防除時期	防除時期の目安	本年予測	平年比	前年比※※※
小麦	ニシノカオリ	開花始め※	4月14～16日	4月12～13日	平年並み	4～5日早い
小麦	ふくさやか	開花始め※	4月12～14日	4月10～11日	平年並み	4～5日早い
裸麦	トヨノカゼ	開花始め※※	4月6～9日	4月6～7日	平年並み	4～5日早い
二条大麦	アサカゴールド	穂揃期後10日目頃	4月13～14日	4月3～4日	平年並み	5～6日早い

※ 小麦の開花始めは穂揃期後2～3日目頃、※※ 裸麦の開花始めは穂揃期～穂揃期後2日目頃

※※※ 前年比は山口県農林総合技術センター調査成績より算出

- (2) 2回目：第1回目の防除後、7～10日目頃
(3) 3回目：第2回目の防除後、7～10日目頃
(4) 詳細は病害虫防除所技術資料第11号を参照してください。

2 防除薬剤及び使用方法

病害虫防除所技術資料第11号を参照し、麦種ごとの登録内容を確認の上、適正に散布してください。なお、裸麦は大麦に含まれます。

3 赤かび病の発生生態と防除上の留意事項

(1) 発生生態

- 病原菌は被害種子や罹病残渣、稲わら、イネ科雑草などの上で越冬し、春、胞子が飛散して穂に感染します。
- 感染は出穂から約2週間が起こりやすく、中でも開花期の感染が顕著です。この時期に曇天、小雨が続き、温度が高いと多発します。

(2) 防除上の留意事項

- 一か月予報では平年並みの気温が予想されていますが、この時期は気温の変化が大きく出穂期が早まることも考えられます。出穂状況を確認することが重要です。
- 赤かび病の防除対策は予防散布が基本です。最も感染しやすい開花始め期の第1回目の防除は、効果の高い薬剤で防除しましょう。
- 赤かび病の防除は、雨の多い時期でも短い晴れ間を利用して適期散布に努めることが重要です。雨間散布における降雨の影響については、水和剤では散布後30分を過ぎれば強い雨(25mm/h)が2時間続いても防除効果は問題になるほど低下しません。一方、粉剤では弱い雨でも5時間以上続けば防除効果の低下がみられます。
- 一般に水和剤、フロアブル剤やゾル剤など液剤の効果が粉剤に比べて優れます。

平成 24 年度農作物病虫害発生予察技術資料第 11 号

平成 25 年(2013 年) 3 月 19 日
山口県病虫害防除所

ムギ類の赤かび病の防除について

本年のムギ類の出穂は 11 月中旬までに播種したほ場では平年並みの見込みです。
ムギ類赤かび病の防除は第 1 回目の防除が最も重要であることから、時期を逸しないよう下記により防除の徹底をお願いします。

記

1 防除時期 (表 1)

- 1 回目：小麦 : 開花始め (穂揃期後 2～3 日頃)
- 裸麦 : 開花始め (穂揃期～穂揃期後 2 日頃)
- 二条大麦 : 穂揃期後 10 日頃 (開花しない(閉花受粉する)ため)

表 1 防除時期の目安(山口県農林総合技術センターほ場:平成 24 年 11 月 15 日播種)

麦種	品 種	1 回目 防除時期の目安	穂揃期 注 1)		
			本年予測	平年	平年比
小麦	ニシノカオリ	4/14～16	4/12～13	4/12	平年並
小麦	ふくさやか	4/12～14	4/10～11	4/10	平年並
裸麦	トヨノカゼ	4/6～9	4/6～7	4/6	平年並
二条大麦	アサカゴールド	4/13～14	4/3～4	4/4	平年並

注 1) 推定有効茎数の約 80～90%が出穂した日(出穂期の 2 日後)を穂揃期とした。
注 2) 防除時期は、播種時期や肥培管理、出穂期前後の気象条件で前後するため、ほ場をよく観察する。

2 回目：第 1 回目の防除後、7～10 日頃

3 回目：第 2 回目の防除後、7～10 日頃

2 防除薬剤

表 2、3 による。

3 防除上注意すべき事項

- ア 11 月中旬までに播種したほ場の出穂期では、平年並～やや早く、12 月に播種したほ場の出穂期は平年並～やや遅い見込みであるため、今後の出穂状況に注意する。
- イ 穂に症状(桃色のかび)が認められるのは乳熟期以降であるため、症状がみられなくても、3 回の防除を必ず実施する。
- ウ 開花期が最も感染しやすいので、防除時期(表 1)が遅れないようにする。
- エ 農薬使用基準を遵守する(表 2、表 3)。なお、農薬散布の際は他作物に飛散しないように注意する。
- オ ほ場近辺の枯草やイナワラは、伝染源となるので除去する。

表2 ムギ類赤かび病の主要防除薬剤(平成25年3月18日現在)

大グループ名	作物名	薬剤名	農薬使用基準				
			使用濃度	10a当たり 使用量	使用 時期 (収穫前 使用日数) (日)	使用 回数 (回)	成分含む 総使用回数 (回)
麦類	—	トリフミン水和剤	1000～2000倍	60～150L	14	3	3(種子粉衣は1回以内)
麦類	—	石灰硫黄合剤	50～60倍	—	—	—	—
麦類	—	サルファーゾル	400倍	—	—	—	—
麦類	—	ワークアップ 粉剤DL	—	3kg	14	2	2
麦類 (小麦除く)	—	トップジンM粉剤DL	—	4kg	14	3(出穂期以降は1回以内)	3(但し、種子への処理は1回以内、出穂期以降は1回以内)
		トップジンM水和剤	1000～1500倍	60～150L	30		
—	小麦	トップジンM粉剤DL	—	4kg	14	3(出穂期以降は2回以内)	4(但し種子への処理は1回以内、散布及び無人ヘリ散布は合計3回以内、出穂期以降は2回以内)
—	小麦	トップジンM水和剤	1000～1500倍	60～150L	14		
麦類 (小麦除く)	—	ストロビーフロアブル	2000～3000倍	60～150L	14	3	3
—	小麦	ストロビーフロアブル	2000～3000倍	60～150L	14	3	3
麦類 (大麦除く)	—	ワークアップ フロアブル	2000倍	60～150L	14	2	2
—	大麦	ワークアップ フロアブル	2000倍	60～150L	14	2	2
—	小麦・大麦	チルト乳剤25	1000～2000倍	60～150L	(小麦) 3	3	5(根雪前は2回以内、春期以降は3回以内)
					(大麦) 21	1	
—	小麦・大麦	シルバキユアフロアブル	2000倍	60～150L	(小麦) 7	2	3(根雪前は1回以内、融雪後は2回以内)
					(大麦) 14	2	
—	小麦	ベルコート水和剤	1000～2000倍	60～180L	21	3(出穂期以降は1回以内)	4(種子への処理は1回以内、散布及び無人ヘリ散布は合計3回以内、出穂期以降は1回以内)

表3 無人ヘリコプター用のムギ類赤かび病の主要防除薬剤(平成25年3月18日現在)

大グループ名	作物名	薬剤名	農薬使用基準				
			使用濃度	10a当たり 使用量	使用時期 (収穫前 使用日数) (日)	使用回数 (回)	成分含む 総使用回数 (回)
—	小麦・大麦	チルト乳剤25	8倍	0.8L	小麦 7	3	5(根雪前は2回以内、春期以降は3回以内)
					大麦 21	1	1
—	小麦・大麦	シルバキアフロアブル	16倍	0.8L	小麦 7	2	3(根雪前は1回以内、融雪後は2回以内)
					大麦 14	2	2
麦類 (小麦除く)	—	トップジンMゾル	8倍	0.8L	21	3(出穂期以降は1回以内)	3(但し種子への処理は1回以内、出穂期以降は1回以内)
—	小麦	トップジンMゾル	8倍	0.8L	14	3(出穂期以降は2回以内)	4(但し種子への処理は1回以内、散布及び無人ヘリ散布は合計3回以内、出穂期以降は2回以内)